

時代背景から見た出雲流庭園とその未来

庭園文化研究分科会 原 裕二

1. 出雲流庭園の特徴

庭園文化研究会では、平成22年度と23年度に計11箇所の庭園を視察し、出雲流庭園の特徴や魅力について検討した。このほか、今までに個人的にほかの庭を見ることもあったし、最近では京都の桂離宮や京都御所の庭を見学する機会があった。

その結果、異論はあると思うが、私の中では出雲流庭園を次のように定義することとした。

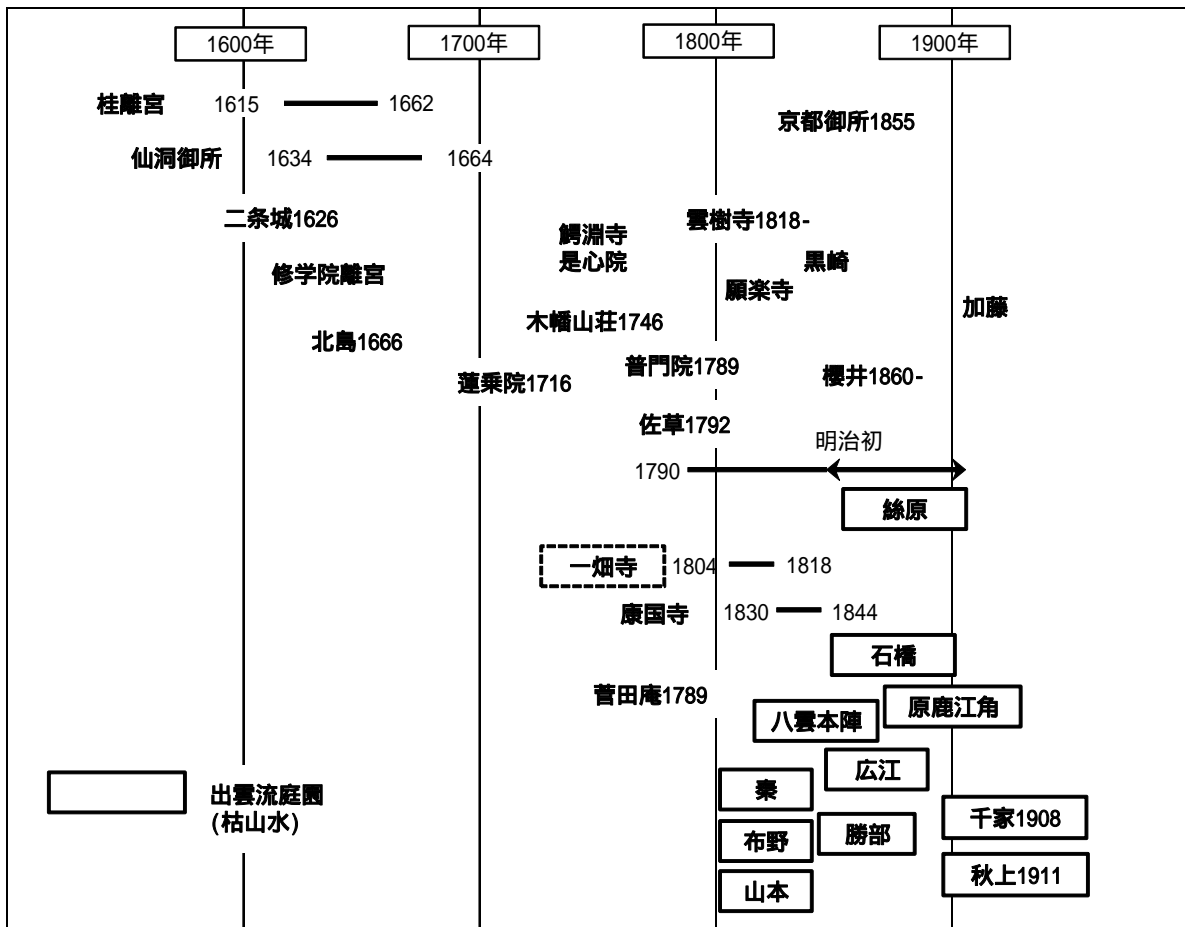
- (1) 池泉がないこと
- (2) 百姓・町人の庭であること(仮に苗字帯刀が許されていたとしても)

今回は、この2つについて、主に時代の移り変わりから述べてみたい。

2. 池泉と作庭年代

次表に主な庭園の作庭年代を示す。年代は各種パンフレットや「出雲流庭園－歴史と造形」などの資料を基にした。

このうち、私が出雲流庭園と判断したものを四角囲いで示す。いずれも池泉がなく、百姓町人の所有である。糸原家庭園には池があるが、出雲流としたのは明治初年に作られた部分だけである。表からわかるように、出雲流庭園の多くは、1800年以降の作庭である。武家が変わって、庶民の経済力が増してきた時期と重なる。



そもそも庭になぜ池泉があるかという疑問がある。

桂離宮のガイドブックによると、「当時流行していた舟遊び（明から伝えられた煎茶の遊興のひとつで、池の周囲に茶店・酒店・飯店を設けてこれらを舟で回る）の影響が見られる」とされている。池泉のある庭は中国から伝来したものであり、最初に貴人の邸宅などで建設された。池泉とはそのような貴族趣味を反映した、あるいは模倣したものらしい。

一方、今まで見てきたうち、一般に寺院にはよい庭が存在する。中でも立派なのは臨済宗妙心寺派であることが多い。臨済宗は枯山水で有名だが、表庭は白砂と石が主体でも、裏の私的な空間は池泉式の庭を備えている（たとえば松江の萬寿寺、大東の龍雲寺、斐川の玉照寺など）。

これは宗教上の理由なのか、作庭年代の関係か、単に偶然なのかは今後の課題である。

いずれにせよ、出雲流庭園からは分けて考えたい。出雲流庭園に貴族趣味や宗教的な要素はないと思っている。

3．出雲流庭園の未来

庭園は、主として樹木と石でできている。庭石はともかくとして、江戸初期に造られた庭と言っても、庭木がその当時のままで残っているのはまれである。庭は何回か改修され、その当時の時代背景や流行、好み、所有者の財力や思い入れなどに大きく左右されると言える。



松江市奥谷町 萬寿寺の庭園

たとえば、今回見た臨済宗雲樹寺は現在は枯山水であり、つつじで有名だが、池の跡があつて先々代の頃はもっと異なった趣であつたと聞く。

桂離宮は江戸時代初期に作庭されたが、初代智仁親王が没した後10年余は荒廃し、二代智忠親王が1600年代中頃に再建された。その後、桂川の氾濫や所管の移転などを経た後、昭和51年から平成3年にかけて大々的に修復されている。当時の様子を忠実に再現したとはいえ、実際に我々が見るのは、現代の桂離宮である。建設当時の数10年間を見ても、当初は小堀遠州好みの直線的な外構で作られた。その後、時代が下がるにつれて、曲線や自然石を多用し、入り組んだ構図が主流となって作庭されていった。この間の変化は、イタリアの建築様式がルネッサンスからマニエリズム、バロックと変わっていった様子とよく似ている。

このように時代背景の変遷を考えた場合、庭を造るだけでなく、維持管理していくためには、出雲流庭園を子孫に残したい、お金をかけて庭をきれいにしたい(自慢したい)、という強烈な意志が必要となる。

しかしながら現代では、一般に家を建てる時、〇〇ハウスや××工務店で建築し、昔ながらの日本家屋とするようなケースはまれになった。まして、「庭付きの家がほしい」というときは出雲流庭園ではなく、芝生の庭を指すことがほとんどであろう。

こういった中で今後、出雲流庭園が、滅びゆく過去の遺物として伝承の中に消えていくか、一部の数寄者の愛好品として細々と残るかは不明である。しかし私としては、発展的に形を変えながら後世に伝えるべき遺産だと確信している。庭園文化を伝えていくためにどうしたらよいか、今後とも模索していきたい。